



志友会報

802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
(株)網武出版 093 (962) 7740 FAX093 (961) 8224
Eメール: saigoa@skyblue.ocn.ne.jp

本紙の年間購読は本体 3,000 円 + 税です。

合気語録

拝師の礼

昨今は武道や格闘技人口が増えているにも関わらず、本道の礼儀と言ふものを知る者が少なくなつた。

しかし一方で、こうした武道や格闘技を愛好し、これに準ずる青少年が多いと言つことは世の中の大半の人がこの、単なるスポーツとは一味違う、武道と言つものに「期待する一面」があるから、時代が如何に変わろうともこうした武技が愛好されるのであろうと思つた。

そして武道と言へば、日本人の文化遺産と誰かが連想するよつに、時代を超えた教育的運用がその背後にあるからだと思われ。

一般的に武道と云へば、「礼に始まり、礼に終わる」と信じられている。

しかし明治維新以降、それ以前の武術は武道と云う新しい時代の認知を受け、術から道への進化を遂げたようなイメージを抱かせる事に成功した。術が道に変わる事によって、これまでの武技が、単に殺し合いでない事を世人に認めさせるイメージを抱かせた。

かくして武術は武道と改められ、アメリカナイズされる事で「科学的」という概念を植え付けて、魅の仕組みを探究し、体育としてこれを捕らえる考え方が生まれた。武道科学を信奉する理論家は、この事に重点を置き、教育における「知育」に對峙するもう一つの両輪の輪として「体育」を挙げた。

そしてこの体育と言ふものは、スポーツゲームのように模擬的な、命の遣り取りとは異なる試合を展開して、その優劣を競つるものになつた。

武道や格闘技は学ぶだけではどうにもならない。相手に討たれ続けられ決して上手と言えず、あくまでも勝たなければならぬのがこの種の武技である。

みると、決して万人が、拍手喝采するような、恰好の良い勝ち方ではない。そこにあるものは、「醜さ」である。

醜さに恥じて、以降、武蔵は巖流島の決闘を最後にブツリと辞めてしまふ。武技は、その戦法や心の虚をついて勝ちを占めると言ふ闘いは邪道と気付くのである。武術の礼法に叶っていないと云ふ事に気付いたの

平成十六年夏季合宿セミナー終了報告

毎年恒例の夏季合宿セミナーが、八月十一日から十五日の期間で西郷派大東流合気武術本部・尚道館で開催された。今年も例年になく参加者が多く、特に習志野網武館より参加した色帯や次期色帯の道場生のきびきびした動きが実に爽やかな印象を与えた。

色帯という階級は軍隊で言うならば、白帯の兵隊と黒帯の幹部を繋ぐ下士官クラスであり、このクラスの人間の能力の有無で、その道場の現在が決定されると言えよう。その意味で、習志野網武館の色帯並びに次期色帯連中の動きと態度は、円滑な役割を演じつつ、傍から見ていて気持ちの良いものであった。

さて、一種独特のすずやかさといさぎよさのそこに存在するものは、一体何であるのか。

私は常々こうした根底に流れているものは、「武士道」であると信じている。武士道の根底に流れる思想は「捨身」であり、この捨身懸命の態度が一種の「死に身」の状態を作り上げ、同時に毅然とした態度の立派さを構築していると思つた。捨身でかかるとは、生と死の二元対極の中で、「あれかこれか」という迷う心がなく、一刹那ある時は身を捨てて全体に奉仕すると言う精神で貫かれている。そして武士道の存在価値は、実にここに帰着するのである。

だからこそ、「死」というものは常に隣りにあつたのである。颯爽たる風貌と言つて、私は常に維新当時薩摩藩を背負つて戦つた桐野利秋(中村半次郎)を思い出す。桐野は普段から西郷隆盛に付き従つて行動しているのは、死に時を間違えない為の用心であると言つていた。

敵と対峙して、刀が折れれば、手で戦い、手を斬られれば脚で戦い、脚を斬られれば這つて戦い、

死ななかつた。昨今の武道や格闘技の世界に於て、礼儀を重んじる良識派の考えで、こうしたものを奨励する団体は極めて少なくなつてしまつた。

また礼儀正しいと自負している団体でも、その礼儀正しさは団体内だけでしか通用しないものであつて、それは単なる、恣意的な習慣であつたり、また、礼儀と云つても、その実態は起

山田次朗吉は師匠の榊原健吉と共に、雪の九段坂を歩いて来た時の事が、この話には出て来る。この話には、ある咄嗟に起つた事を取り上げている。

雪の為に健吉の履いていた下駄が滑つて鼻緒が切れ、我が師・健吉が顛倒しようとした瞬間、山田は健吉の鼻を咄嗟に支え、残る片手で、今度は自分の履いていた下駄を素早く脱いで、師の足許にあつたという間に差し出したのである。一瞬のうちに踏み履かせ、顛倒を防止すると同時に、我が師の足許に、自らの下駄を踏み敷かせたのである。

これこそ、まさに臨機応變の最たるもので、これ以上の「妙」はない。顛倒しようとする人を支えるくらいなら兎も角として、咄嗟に自分の履いている下駄を脱いで、その足許にさつと差し換える妙技を行えるのは、凡夫には中々できる事ではない。つまりこれはその人の持つ、才能と素質が、このような妙技に至らせるのである。

立や規則と云う程度のようなもので、門人や会員の行動の自由を制限している道具に成り下がっているものも少なくない。そもそも「礼」というものは知性と感性によって貫かれるべきものである。

更には、自発的な行動律であるから、教養としての見識と柔軟な直感力を心の支えにしなければならぬ。

に教えるものである。漫然と師の伴をしていては、こうした事は出来ないはずである。こうした働きができるのは、その根底に、「薪水の労をとる」という心構えが、普段から常に備わっている為である。

昨今は道案内と称して、師匠の前を自分勝手にスタスタ歩く、礼儀知らずの弟子が多いが、もし、山田次朗吉が榊原健吉の前を歩いていたら、顛倒しかかる師匠の鼻を支え、残る片手で自分の下駄を脱ぎ、それを師匠の足許に掛け替える等と言ふ妙技は行はずがなく、やはり、この場合は、「三歩下がって師の影踏ます」という諺が功を奏した事になる。

しかし「薪水の労をとる」とは、門人の上に胡座をかいて君臨し、師は弟子に對し指導者面する事ではない。また、こうした事を現代の若い門人に要求する事でもない。

しかし、修行するといふ日々精進の世界は、有事に際して咄嗟の措置が出来なくては、その人は武道愛好者の域で止まる人なのである。

また精進する世界を、単に勝ち負けにこだわつて練習する人間には、こうした「切実」かつ「純真」な心が理解できず、ついには有事に際して、何一つ役に立たない禍根ばかりを積み上げていく人なのである。

現代のスポーツ界や格闘技界を見てみると、試合での勝ちを求める余り、慣習と切り離せない形態をとっているのに、左顧右眈する芸人根性が丸出しになつてしまつた観る感じる事が多い。しかし武術の世界にはこうした態度は似合わないものである。やはり武術の姿はどこまでも「爽やかさ」を追求すべきで、その根底には、自分の行動を毅然とした態度で貫き、これに一切悔しめない事がその思想背景でなければならぬと思つた。

今回の夏季合宿セミナーにおいてこうした人の姿を見かけたことは、現代を憂ふる私としては、せめてもこの慰めであつた。

(宗家 曾川和翁)

茨城地区宗家直伝講習会

講習会日時：10月23日(土)午後五時半集合～24日(日)正午解散
於て：JRA日本中央競馬会美浦厚生会館内・茨城支部道場

お問い合わせEメール: saigoa@skyblue.ocn.ne.jp

お問合せ: 〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
総本部 尚道館 093 (962) 7710代表



指導内容：
合気揚げを中心にした力
貫・合気初伝から奥伝・合
気柔術合気行法・野営実践
稽古・野営における食養野
草の智慧・靈的食養道など
詳しくはホームページで：
<http://www.daitouryu.com/>